図書館を発掘せよ

教育学研究科一年　藤原　与志樹

たまに来る友達が、お前の部屋は広くていいと言う。稼ぎに見合う住処を求めて、引っ越すことが多かった。おかげでテレビも食卓も、本棚も。かさばるものはみな、手元を離れた。つまらなくないかと、友達は言う。ゲーム機もなければ、ステレオもない。言ってしまえば貧乏なのだが、まあ、確かにそう思うことはある。それでもパソコンでメールのやりとりができるし、本棚がなくても、図書館を使うことができる。

図書館を一番図書館らしく使っているのは、学習障害の子どもたちだろう。つまり、遊びに行くのだ。お気に入りの本を何冊も抱えてきて、床に座ったり、椅子に寝そべったりして過ごす。大学生ともなれば、寝そべるわけにもいかないが、しかし小学校の図書室も、大学の立派な付属図書館も、利用のされかたの理想は、ほとんど変わらないはずだ。大学にだって、寝ころんで読みたい本がある。

そういう本は、ひとそれぞれにあるだろう。だから私は、私の思う一冊を紹介しよう。と言っても、実は普通の本じゃない。教科書と言ってしまうと別格になるから、雑誌の類とでも思ってほしい。学芸会で『夕鶴』をやったひともいるだろう。その作者、木下順二（1914 - 2006）らの手になる、改訂『中学国語２』がそれだ。言うまでもないが、これを一般の図書館で読むことはできない。教育大学の図書館ならではの、秘蔵っ子である。

この『中学国語２』が編まれた八〇年代というのは、校内暴力が、全国津々浦々の学校に吹き荒れた時代でもあった。そういう時代の社会的な要求は、教科書に反映されるだろう。そういう見方をすると、あまり面白い本ではないかもしれない。でも、そこに収録された文章は、どのような意図で収録されたにせよ、その意図の以前にはもう、この世にあった。例えばある宗教が、ベストセラーの一冊を取りあげて、教典だと宣言したとしよう。それでもなお、その一冊が何か、ほかのものに変わってしまうわけではない。分別を発揮して、この本を開いてください。

すると、どう。古今東西の名作佳作が、ダイジェストになって読めるでしょう。面白いところだけを、これ一冊でつまみ食いできるというのは、実に愉快じゃありませんか。これは、どこから読み始めてもいい。よりどりみどり。それだけの数の作品が、この一冊にはある。これを教科書だと思って、最初から律儀にやってごらんなさい。きっとウンザリする。その意味で、このごろの国語の教科書は、適切な分量を目指していると思う。

私はこの一冊で、国語が好きになった。いや、国語がと言うのは、少々違う気もする。国語という学問は、相変わらず嫌いだから。今はもう、こういう読み方、楽しみ方のできる国語の教科書というのは、なくなったのだろう。なくなって当然とすら、言えるかもしれない。開くたびに、まだ読んだことのないページ、あるいは以前読んだが、もう忘れてしまったページが現れる。それだけの作品数、あるいはそれほどの内容を持った国語の教科書というのは、適切な分量という考え方からすれば、文字通り、無用の長物でしかない。

でもいったい、国語という教科を通じて、いわゆる「この一冊」に出会うことのできた子どもは、何人くらいいるのだろう。「たった一冊の本しか読んだことのない人間を警戒せよ。」という一文に惹かれて応募した、今回の論文であった。しかし書き進むうち、私は私の中で、この一文にはなかなか納得がいかないということに気がついた。むしろ、百冊の

本を読んでいながら、「この一冊」に出会わなかった奇跡のひとを、私は警戒する。いったい、何を読んできたのだろう。そんなふうに、いぶかってしまうが。そのひと個人の問題なのか。

百冊読めば、一冊くらい当たっていそうなものだ。それでもなお、出会わなかったというのならば、残された可能性として、百冊全部がハズレであったと、考えざるを得ない。全部ハズレ。そんなことが、ありうるのかどうか。そこで私は、自費出版ブームに乗って放出された、ものすごい数の私的な本や、ここ数年、ものすごい勢いで生活の中に浸透してきた、ウェブログなどを思い浮かべる。これらの創作過程は、実に手軽だ。その手軽さは、このごろの商業出版に対しても、そのまま当てはまるように思える。そこから、「この一冊」が生まれうるか。共感や、笑いのツボを突かれることは、ままあるとしても。

そういうことなら、百冊読んでも駄目だというのも、あり得なくはない。なんだか、宝くじを買うような話になってきた。百ぺん買っても当たらない。そういう本が今、砂漠の黄色い砂塵のように、図書館の棚という棚を埋め尽くそうとしている。図書館は悲鳴をあげた。エンデの『ネバーエンディングストーリー』のごとく、Help me, please. と言ったが、まだ、誰の耳にも届いていないようだ。だから人間よ、図書館を発掘せよ。チリに埋もれた地下の洞窟から、自分たちの足跡を発見したまえ。『中学国語２』が、君を導いてくれる。笑い話のようだが、本当だ。「この一冊」にはなり得ないだろう。けれど、「この一冊」を探す指南をしてくれる。昔のひとと同じに、自分の力で探していけるよう、君を鍛えてくれるはずだ。

八〇年代、荒れに荒れた子どもたちに、大人たちから手渡す一冊の読み物として、改訂『中学国語２』は作られた。先に触れたような意図も、含まれているだろう。でも、それだけではない。私はみなさんに、できたらそういうところまで、合わせて読んでもらいたいと思う。自分にとっての「この一冊」。卒業までに、みなさんのうちの一人でも多くのひとが、それに出会うことができたらいい。仕事に就くと、なかなか、そういう時間は持てないから。

おわり